

第 102 回 理事会・拡大執行委員会 議事録

日時：2022 年 8 月 3 日（水曜日） 14 時～18 時

開催方法：Web 会議システム（Zoom）利用

【出席者（Web） 29 名】※敬称略

[理事]

柚崎 通介（会長）、加藤 忠史（副会長）、磯村 宜和（庶務理事）、大塚 稔久（副庶務理事／大会委員会委員長）、宮川 剛（副庶務理事／将来計画委員会委員長）、山中 宏二（会計理事）、岩坪 威（理事）、大隅 典子（理事）、奥山 輝大（理事）、笠井 清登（理事）、木山 博資（理事）、定藤 規弘（理事）、銅谷 賢治（理事／第 45 回大会長）、林（高木） 朗子（理事）、林 康紀（理事／脳科学辞典編集委員会委員長）、尾藤 晴彦（理事／第 44 回大会長／将来計画委員会 日中韓 WG 委員長）、藤山 文乃（理事）、渡辺 雅彦（理事）

[委員会委員長]

掛川 渉（ホームページ委員会委員長）、合田 裕紀子（国際連携委員会委員長）、櫻井 武（ブレインビー委員会 委員長代理）、竹村 文（動物実験委員会委員長）、竹本 さやか（神経科学ニュース編集委員会 委員長代理）、花川 隆（倫理委員会委員長）、平井 宏和（将来計画委員会 学会体制 WG 委員長）、Thomas J. McHugh（将来計画委員会 機関誌 WG 委員長）、松田 哲也（アドボカシー委員会委員長／利益相反委員会委員長）、松元 健二（アウトリーチ委員会委員長／産学連携推進委員会委員長）、吉本 潤一郎（情報基盤整備委員会委員長）

【欠席者 11 名】※敬称略

岡部 繁男（副会長）、上口 裕之（機関誌理事／NSR 委員会委員長）、山中 章弘（広報理事）、大木 研一（理事）、岡野 栄之（理事）、小林 和人（理事／第 46 回大会長）、奥村 哲（ブレインビー委員会委員長）、尾崎 紀夫（臨床・関連学会連携委員会委員長）、古屋敷 智之（神経科学ニュース編集委員会委員長）、宮田 麻理子（生物科学連合担当委員会委員長）、渡部 文子（ダイバーシティ対応委員会委員長／奨励賞選考委員会委員長）

【報告事項】

- 1) 磯村宜和庶務理事より、会員数の推移に関する報告があった（資料 A）。会員総数は 5,891 名と微増した。その内訳として、正会員（海外含む）が減少した一方、若手会員と学生会員（いずれも海外含む）が増加していた。若手会員の増加は学生会員からの移行が自動化されたことが一因であろう。学生会員の増加は 4 年ぶりである。ただし、コロナ禍が収束に向かいつつあることの一過的な反映かもしれない。以上の分析から、会員減少に歯止めをかけるために、引き続き会員数の推移を注意深く見守ることが報告された。
- 2) 銅谷大会長より、第 45 回（2022 年）大会、Neuro2022 の終了報告が行われた。演題数や参加者数、各種収入や Travel Award の実施状況等に加えて、特にコロナ禍における沖縄での合同大会という観点から、第 45 回大会に関する特記事項が述べられた。また、Confit の meeting planner に基本的な機能（検索リストから My Schedule への登録と確認、時間順にソートした出力、等）が不足しているため今後は改善の必要があること等、次回大会への申し送り事項についても、報告、議論が行われた。
- 3) 小林大会長（磯村宜和庶務理事が代読）より、第 46 回（2023 年）大会の準備報告が行われた。各種委員会のメンバーやプレナリーレクチャーをはじめとする主な講演者の依頼と決定が行われたことに加えて、大会 HP や各種広報用素材が完成し、公募シンポジウムの募集が開始された旨、今後の準備スケジュール等が述べられた。
- 4) 岡部大会長（大塚実行委員長が代読）より、第 47 回（2024 年）大会の準備報告が行われた。第 67 回日本神経化学会（大会長 小泉 修一（山梨大学））、第 46 回日本生物学的精神医学会年会（大会長 山末 英典（浜松医科大学））との合同大会として開催予定である旨や、会場、会期に加えて、本学会の大会役員や、今後の準備スケジュール等が述べられた。
- 5) Neuroscience Research Thomas J. McHugh 副編集主幹より、2021 年に投稿された 645 報の査読審査実績、2022 年以降の特集号発行予定、総説等の執筆依頼状況、プロモーション活動等について説明があった。今後も年間 3 号の特集号の発行を予定していること、2023 年 NSR 論文賞の選考を行うことが報告された（「NSR 委員会 報告事項」参照）。
- 6) 奨励賞選考委員会の渡部文子選考委員長（磯村宜和庶務理事が代読）より、委員会の活動報告が行われた。奨励賞受賞候補者 5 名（うち女性 1 名）の受賞が確定し、Neuro2022 で授賞式が行われた旨、および日本学術振興会賞（学会推薦若手枠）の推薦、時実記念神経科学優秀博士研究賞の選考と表彰、育志賞（学会推薦・若手枠）の推薦、今後のスケジュール等についての報告があった。特に、時実記念神経科学優秀博士研究賞については、発表順によって一部の候補者が他候補者より有利になる可能性について議論が行われた結果、引き続き全員参加の形式で行うことが決定された（「奨励賞選考委員会 報告事項」参照）。

【審議事項】

- 1) 法人化実行委員会の磯村宜和委員長より、「一般社団法人化を見据えた会則の改定および定款案等の検討」が示された。一般社団法人化の概要に加えて、現行の会則の改定案が提示され、質疑応答を経て、①日本神経科学学会会則 第七条（評議員の選任）および付則 1 2 の改定、②日本神経科学学会会則 第七章（解散および清算）の第二十六条から第三十一条の追加、③一般社団法人化を見据えた移行案全般（定款案および細則案等）の検討、はいずれも条件付きで承認された（「法人化実行委員会 審議事項」「法人化実行委員会 報告事項」参照）。
- 2) 山中宏二会計理事より、NSR 会計 2021 年度確定決算案と 2022 年度修正予算案が示され、承認された。
- 3) 山中宏二会計理事より、継続的大会会計 2021 年度決算案と 2022 年度予算案が示され、承認された（資料 B, C）。
- 4) 柚崎会長より、第 48 回（2025 年）大会の会場候補が示された。札幌コンベンションセンター、朱鷺メッセ、および G メッセ群馬の 3 会場について検討の結果、札幌コンベンションセンターでの開催が有力であるとの結論に至った。
- 5) 磯村庶務理事より、ジョゼフ・アルトマン記念発達神経科学賞の選考委員の交代に関する提議があった。選考委員 6 名のうち星野幹雄委員長、今吉格委員、花嶋かりな委員の 2022 年度の任期満了に伴い、新委員 3 名として中島欽一委員、竹内春樹委員、石田綾委員の就任が承認された。また、新委員長として後藤由季子委員の就任が承認された。

【各委員会・WG の活動報告】

（各委員会を参照）

NSR 委員会報告事項

（前回の理事会以降の活動報告）

- 2022 年 NSR 論文賞受賞論文を神経科学ニュース 5 月号への掲載で発表した。
- NEURO2022 の会場にて、上記論文賞の授賞式および受賞講演が行われた。
- Scientific Managing Editor (SME) 制度が 4 月に稼働を開始した：2022 年 7 月 20 日までの間の他誌への transfer の提案 58 報、他誌からの transfer 9 報（Neurosci Lett 7 報、Brain Res 1 報、不明 1 報）。
- 他誌から転送された投稿論文の取り扱いについての統一見解を設けることが提案され、メール

審議によりガイドラインを策定した。

(今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画)

- 経常的な編集関連業務とプロモーション活動を継続する。
- 2023 年 1 月の NSR Best Paper Award と NSR Excellent Paper Award の選考に向けて、委員各自が候補論文を随時リストアップする。

(特記事項)

論文がどの国から投稿されているかと、論文（特に SME 制度を介して投稿された論文）の質はどうかとの質疑応答があった。NSR 論文賞を開始したのは良いとのコメントがあった。

奨励賞選考委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

1, 奨励賞

2021 年 11 月 4 日に行った奨励賞選考委員会の結果選ばれた 5 名について、2 次審査である NSR への総説を 3 月末までに投稿した 5 名について最終確認を行い、5 名全員が受賞確定となった。受賞者は Neuro2022 にて受賞式に参加した。

- 宮本 大祐 富山大学
- 柳下 祥 東京大学
- 小野 大輔 名古屋大学
- 後藤 明弘 京都大学
- 荻郷 友美 ジョンズ・ホプキンス大学

2023 年度の募集案内については HP 掲載済み、神経科学ニュース 8 月 10 日発行号にも掲載予定（オンライン応募システム未達のためメールでの応募受付予定）である。

2, 日本学術振興会賞（学会推薦若手枠）

2022 年 3 月 4 日締切で 2 名の応募があった。学会における推薦枠の定員が明示されておらず、委員会にてメール審議を行った結果、2 名とも推薦との結論となった。その後、2 名とも学会から推薦をおこなった（結果通知は 12 月下旬予定）。

- 伊藤 博 (マックスプランク研究所)
- 五十嵐 啓 (カリフォルニア大学アーバイン校)

【両者ともに Moser 研出身者であり、分野の重複に関して今後は議論されてもよいかもしれない。】

3, 時実記念神経科学優秀博士研究賞

応募者 26 名 (うち女性 3 名、外国籍 5 名)

ヒアリング選考者 10 名 (うち女性 1 名、外国籍 1 名)

2022 年 6 月 23 日 (木) に zoom にてヒアリングの結果、5 名 (うち女性 1 名、外国籍 0 名) を選考した。受賞者は沖縄大会で表彰を行った。

- 野口 朝子 (東京大学)
- 廣木 進吾 (東京大学)
- 平本 篤紀 (Institute of Molecular and Clinical Ophthalmology, Basel)
- 吉松 祥 (慶応義塾大学)
- 中村 匠 (理化学研究所)

【議論された点】

募集要項と選考方針を再確認し、関連資料をふまえて議論した。得点順位だけではなく、研究実績、将来性、経歴、ダイバーシティ、パネル比率、脳科学および学会への貢献など、多くの観点から議論をおこない、ボーダーライン上の応募者に関しても十分に検討したうえで、最終的に 5 名を候補者として選出した。

【今後の課題】

Zoom でのヒアリングにおいて、候補者全員が最初から最後までオンライン参加であったため、順番によって他の質疑応答の様子などを聞くことができるかどうかで不公平が生じる。入退室の時間ロスや手間もあろうが、来年度以降は申請者同士が互いの発表を聞かないよう工夫されることが望ましい。

4, 育志賞 (学会推薦・若手枠)

2022 年 4 月 26 日締切で 1 名の応募があった。メール審議の結果、学会推薦対象者 1 名が推薦可とされ、学会推薦の申請を行った (結果通知は 2023 年 1 月末ごろ予定)。

指名委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

- アルトマン賞選考委員（任期4年・2年毎に半数入れ替え）および選考委員長の推薦を行った。
 - アルトマン賞委員会審議事項参照。
- 生理学研究所外部評価委員の学会推薦枠の選考を行った。

(今後、約6ヶ月の活動目標・計画)

- 引き続きダイバーシティに考慮しながら、適切な人の選考を公正に行う。

(将来的な検討課題)

- 各種の外部表彰への学会推薦については受動的に選考を行うだけでなく、学会から候補となる先生方に積極的に声をかけることについても検討している。

将来計画委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

- 公開大討論会について

Neuro2022の特別企画として、JNS将来計画委員会の主催によるランチョン大討論会「脳科学は次の10～20年に何をどう目指すべきか？」を、大会最終日、7/3(日) 12:00-14:00に開催した。本企画は、研究者コミュニティとして、次の10～20年、脳科学が「何を」、「どう」目指すべきかについて、高名な先生だけでなく、若手・中堅も含めた一般学会員も一緒に考えるという企画とした。

研究が高度化・大型化される中で、研究者コミュニティとして何をどのように研究するのかという問題に目が向けられるようになってきた。脳科学の今後10～20年について、本企画では「何を指すか」では具体的な学術テーマを中心に、「どう指すか」では、必要な仕組みや現状の諸問題（起業、大型研究費/基盤的研究費、について議論を行った。

Neuro2022での5つのシンポジウムと、日本神経化学会の「フラグシップ・プロジェクト」について、6名の先生方に、当該の分野で何をどう目指すのかについて、それぞれのミニ・プ

レゼンテーションのあとに、総合討論を行った。現地参加者が 158 名、オンライン参加者は 244 名、計 402 名の参加者。

宮本大祐（富山大）「脳情報表現の時間的変容への光学的アプローチ：行動からシナプスまで」

近添淳一（株式会社アラヤ）「情動情報解説による人文系学問の再構築」

茨木 拓也（株式会社 NTT データ経営研究所）「産学連携シンポジウム：メタバースと脳科学」

今井 猛（九州大）「感覚・運動回路の神経活動依存的な回路発達」

尾崎紀夫（名古屋大）「Neuro2022 で基礎学会と臨床学会を結ぶ（JNS/JSN Joint 基礎・臨床連携シンポジウム）」

林朗子（理研 CBS）「日本神経化学会フラグシップ・プロジェクト について」

司会：宮川剛（藤田医科大）

パネリスト：柚崎通介（慶應大、JNS 会長）、伊佐正（京都大、日本脳科学関連学会連合・代表）、藤山文乃（北海道大）、林朗子（理研 CBS）、紺野大地（東京大）、菱山豊（徳島大・副学長、元文部科学省科学技術・学術政策局長）

予算として、ランチョン大討論会（@NEURO2022）の開催費用（100 万円）を計上し、最終的な収支（お弁当代プラス菱山先生の旅費・宿泊費）で約 40 万円強となっている（現在、沖縄コングレが正確な額を計算中）。

- NSR の契約更改について

機関誌 WG の McHugh 委員長を中心に、柚崎会長、上口編集長、宮川・将来計画委員長などで、エルゼビアとの時期の契約について交渉を行っている。以下、現状のエルゼビアからの提案の重要ポイントを箇条書きにしておいたが、詳細は機関誌 WG からの報告を参照のこと。

- ・ エルゼビアの意向で、NSR はゴールドオープンアクセス誌となる可能性が高い（2023 年 1 月または 2024 年 1 月から；おそらく 6～7 年の契約）。
- ・ エルゼビアから支払われる Editorial fee、Society royalty は、現状の倍程度が提案されている。
- ・ APC は、学会員\$2000～2300、非会員\$2600～\$3000 程度（徐々に値上げするモデル）。年間 20 報程度の招待論文の無料枠。
- ・ 年間の出版報数の目安は不明だが、現状よりも多い報数の出版が期待されるはず。論

文の質を下げずに出版報数を維持できるかどうか懸念事項。

- ・ ジャーナルタイトルのオーナーシップはエルゼビアが 100%保持し続ける前提の提案であるが、ここに交渉の余地があるかどうか問題。
- ・ KWF consulting に交渉の仲介を依頼。近日中にミーティングを予定している。

(今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画)

- ・ 今年度も継続して以下の活動を行う。
 - ・ 第 46 回日本神経科学大会 (2023 年) のランチョン大討論会を準備・実施する。
 - ・ 機関誌の今後について、契約更改を中心に検討を継続する。
 - ・ 大型研究費のあり方について検討を進める。
 - ・ キャリアパスや、研究費の問題など、神経科学スペシフィックではないが神経科学分野の研究者にも重要な各種の分野横断的イシューについての検討を進める。日本科学振興協会 (Japanese Association for the Advancement of Science; JAAS) が NPO 法人として設立されたが、分野横断的イシューについての JAAS との連携についても議論を行う。

将来計画委員会 機関誌 WG 報告事項

- ・ 特になし

将来計画委員会 日中韓 WG 報告事項

- ・ 特になし

将来計画委員会 学会体制 WG 委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

- ・ 日本神経科学学会の法人化について

学会体制 WG から平井、石川、吉本が法人化実行委員会に参加し、法人化に向けてメール会議、オンラインでの会議を通して細部を検討した。

6/8 法人化・選挙に関する打ち合わせ Zoom 会議

6/16 法人化・選挙に関する打ち合わせ Zoom 会議

7/12 法人化・選挙に関する打ち合わせ Zoom 会議

- 年会費支払い方法の集約についてアンケートを行い、寄せられた意見について検討した。

(今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画)

- 法人化実行委員会の活動に協力する。
- 年会費支払い方法の集約についてアンケート結果をもとに、事務局の意見も聞いてさらに検討を進める。

法人化実行委員会審議事項

(審議事項)

「一般社団法人化を見据えた会則の改定および定款案等の検討」

背景・経緯

本学会は、より公正な学会運営と社会的な信頼の確保のために、2023 年 4 月に現在の任意団体（権利能力なき社団）から一般社団法人に移行する計画を進めています。これまでに理事会、執行委員会、将来計画委員会（学会体制 WG）、法人化実行委員会で一般社団法人化に関する検討を重ね、複数回の会員アンケートから集まった意見も反映して一般社団法人化の具体案を作成しました。また、昨夏の総会では一般社団法人の基盤となる評議員制度の導入に関する会則改定も承認されました。

このたび専門家（司法書士、公認会計士、公証人）のご指導を受けて、一般社団法人への移行に必要な現行の会則の改定案および新法人の定款案と細則案などを作成しました。このうち本学会が現行の任意団体から一般社団法人に移行するための端緒と位置づけられる会則改定案をご審議いただきたい。

審議を要する項目

- 1) 日本神経科学学会会則 第七条（評議員の選任）および付則 1 2 の改定
- 2) 日本神経科学学会会則 第七章（解散および清算）の第二十六条から第三十一条の追加
- 3) 一般社団法人化を見据えた移行案全般（定款案および細則案等）の検討

具体的内容（目的・方法・効果・課題など）

一般社団法人化の概要（資料 A, D, E）

□学術ドメイン制度

A.基礎神経科学 B.システム・情報神経科学 C.臨床・病態神経科学

□評議員の選出（※初回選挙（本年 11 月頃）100 名）

評議員（50～200 名）は、正会員群が正会員群から選挙する。任期 1 期 4 年。

□理事の選出（※初回選挙（来年 2 月頃）新規理事 10 名・留任理事 10 名）

理事（10+10 名）は、評議員が評議員から選挙（半数改選→信任投票）する。任期 2 期 4 年。

□理事長の選出

理事長（1 名）は、理事から選挙で選ばれる（互選→信任投票）。任期 2 期 4 年（期待）。

□委員長等の指名

理事会（理事長）は、監事、委員長、理事長補佐、機関誌編集主幹、大会長を選任する。

現行の会則の改訂案（資料 B, C）

□日本神経科学学会会則 第七条および第七章第二十六条～第三十一条

（理事会での質疑応答）

- [A 概要] 理事長補佐（理事の議決権なし）として権力者が居座ることを危惧する。
→ 内規レベルで歯止めをかけることを今後検討する。
- [A 概要] 大会の予算は 2 年越しなので、移行期の予算管理はどうするのか？
→ 現在、学会本体と大会の予算は別扱いであり、いずれも私人名義の口座で管理する状況にある。法人化後は法人名義で適正に管理できるメリットがある。移行期にあたっては、専門家の指導下で、大会の運営に不都合が生じないように円滑な段取りを検討していきたい。
- [A 概要] 移行期に会費の請求はどうするのか？
→ 現在の任意団体から新法人へは、会員と会費の徴収権もすべて移行する。なるべく会費徴収の時期を移行期からずらすこととしたい。滞納者の対応にも留意する。
- [A 概要] 委員会の体制や活動はどうなるのか？
→ 現行の任意団体の理事会は、移行後に解散するまで任期を延長して運用体制を維持する。従っ

て、現理事会が構築した委員会の体制も解散まで存続することになる。新法人における委員会の体制は、新理事会の判断に委ねる。また、NSR の編集体制と各大会の準備体制は、基本的には従来通りの運用体制で維持する。

- 〔BC 会則改定案〕 現会則の改定案の第七条「・若手会員」は不要。
→ 削除する。
- 〔BC 会則改定案〕 現会則の改定案の第七章（解散および清算）には解散日と手段が特定されていない。
→ 改定案に、理事会が解散日を定める旨を追記する。
- 〔D 定款案〕 定款第 4 条(4)の表記について（「調査活動」は変、「等」に寄付など広く含まれるのか、産業界との連携は、「に必要な事業」でまとめたら、などの意見）。
→ 司法書士に確認の上、定款第 4 条(3)と(4)の表記を改善する。
- 〔D 定款案〕 定款第 11 条に「成年被後見人または被保佐人」が必要。
→ 司法書士に確認の上、定款第 11 条(2)として追加したい。
- 〔D 定款案〕 定款第 16 条「会員」（見出し含む）は「正会員群」では？
→ 司法書士に確認の上、必要に応じて修正する。
- 〔D 定款案〕 定款第 16 条は第 2 章の最後に移動する方が良い。
→ 司法書士に確認の上、必要に応じて修正する。
- 〔E 細則案〕 内規の扱い。
→ 内規は理事会が定め、理事会の外には開示しない。内規の策定と整理のための内規規程のようなものを作成したい。
- 〔E 細則案〕 第 11 条と第 20 条に関する内規にある「アダムス式」とはどのようなもの？
→ 学術ドメインで比例配分して定数を定める際に端数が出た場合に少数派が有利になる算出法であり、ダイバーシティへの配慮に相応しい。国政選挙では従来のドント式に代わりアダムス式を採用すると聞いている。
- 〔E 細則案〕 評議員等の男女比率に関して、女性 30%以上の数値目標を明記できないか？
→ 当初案では新法人の内規として女性 30%以上の数値目標を掲げていたが、新法人の選出細則の第 15 条と第 24 条に格上げして、評議員等の女性 30%以上の数値目標を明記したい。
- 〔E 細則案〕 第 29 条の「会員」は「正会員群」では？
→ 修正する。

（結論）

- 1～3) 条件付き承認： ただし、上記の指摘事項に適宜対応する。

法人化実行委員会報告事項

（前回の理事会以降の活動報告）

- 2022 年 5 月、一般社団法人化の実施案と Q&A を会員に広報し意見を収集するパブコメ（第 3 回会員アンケート）を実施した。（回答数 330 件、うち日本語 303 件、コメント 51 件）
- 法的専門家（魚本司法書士・亀岡公認会計士）の指導下で定款案および選挙細則案の作成を進めている。

（今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画）

- 2022 年 8 月、一般社団法人の定款案、選挙細則案、移行手続案などを完成させて総会での承認を得る。
- 2022 年 9～11 月、理事選挙の実施をサポートする。
- 2022 年 12 月～2023 年 2 月、評議員選挙の実施をサポートする。
- 2023 年 4 月、一般社団法人の発足
- 2023 年 6 月頃、一般社団法人の提示社員総会の開催

（特記事項）

- 別途提起した審議事項 2-1（一般社団法人化を見据えた会則の改定および定款案等の検討）の議決を受けて、上記の活動計画を実行することとなった。

大会委員会報告事項

（前回の理事会以降の活動報告）

- スポンサー獲得のための声掛け（実績は銅谷大会長より）

（今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画）

- シニア会員の定義について：法人化に合わせて、細則（案）を作成する。

（特記事項）

- FAONS と CJK との関係について（意見交換）

国際連携委員会報告事項

（前回の理事会以降の活動報告）

【1】トラベルアワードについて

- 相互 Travel Award 人数

2022 年	Inbound	Outbound
SfN	5（うち 4 名現地参加）	5 名採択予定（応募 16 名）
FENS	12 名（うち 3 名現地参加）	5 名（全員現地参加） ※2020 年受賞者 1 名、2022 年受賞者 4 名

※FENS TA 2020 年受賞者 3 名が参加延期。1 名は今年のパリ大会に参加、1 名が受賞辞退、1 名が 2024 年への参加延期を希望。延期について FENS 事務局は了承。ただし、MOU 更新交渉へは、2024 年大会派遣（採択）数に含める必要あり。

- CNS Travel Award 選考も SfN-TA と FENS-TA と同様に今後は CV の提出を求める。

【2】2023 年仙台大会 日本-中国合同シンポジウム企画について

- 中国側とのリエゾンを要する際には国際連携委員会が対応可能
- 小林大会長、磯村プログラム委員長、CJK の尾藤先生と調整しつつ進めていく

【3】2022 SfN Sponsored Social “Global Neuroscience Social”企画について

- 11/15/2022, 6:45-8:45 p.m. @Marriott Grand Ballroom 4
- 多様性とグローバルなコネクションを作る機会をアピール

（今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画）

- 引き続き各種トラベルアワードの選考も含めて国際連携の促進を図る
期限を迎える協定書について更新の交渉を進める：FENS、2022 年；ルンドベック財団、2023 年
- モンゴル神経科学学会長 Battuvshin Lkhagvasuren 氏から若手研究者育成支援について相談があり、日本から講師の派遣、モンゴルの学生の短期受け入れ、オンライン授業の受講枠設置などの可能性を探っていく

情報基盤整備委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

- 2022/05/01 SE 松本様との業務委託契約を1年間更新
 - 過去1年間の実績において、コンテンツの更新作業が当初予定より20%程度多かったことを考慮し、契約額を月額9.9万円(税込)から11万円(税込)に増額。それに合わせて、コンテンツの更新作業の見込み件数も月あたり50件程度から60件程度に変更。
 - その他の契約内容については昨年と同条件
- 2022/07/27 情報基盤整備委員会・オンライン開催
 - レンタルサーバ・保守業者の移管について
 - Slackの代替コミュニケーションツールについて
 - SE 松本様への委託業務について
 - 新体制への引継ぎについて

(今後、約6ヶ月の活動目標・計画)

- サーバ保守に関する長期プランの策定
- 引継ぎ資料(SE 松本様との契約内容; 保守業者選定の経緯など)の作成
- 理事選挙、評議員選挙のための選挙システムの実装とテスト

(特記事項)

【提案】

- Slackのフリープランの機能制限に対する対策について
 - 当面はフリープランで様子を見る
 - 記録として残すスレッド(議事や報告書)はGoogle DriveやDropboxなどに保存し、slackにはそちらへのリンクをピン留めする
 - 上記の運用で不便がある場合に、アクティブユーザを数名にして有償プランにアップグレードにして、多くのメンバは「シングルチャンネルゲスト」としてワークスペースに招待する
- 事務局用Dropboxの有料プラン(Professional ライセンス: 月額2,000円)の導入について
 - 事務局用ストレージのクラウド化(事実上バックアップ不要に)
 - 各種委員会の保存すべき資料(議事録や引継ぎドキュメント)を一元管理

- 上記 Slack との連携も容易になる

【理事会での質疑応答】

- Slack について
 - スレッド、チャンネルのファイル保存は可能か？
 - 可能であるが、ビューアがないと閲覧は困難かもしれない。
 - 定期的なバックアップ保存はするようにしておく。
- アクティブユーザの数だけ課金されるので、有料プランに切り替えても実質的に 0 か非常に安価になるのでは？
 - その通りであると思うが、アクティブユーザの定義が不明なので、正確には答えられない。
- クラウドストレージについて
 - どれが最適かはわからないが、事務局で必要となるので、前向きにしていきたい。

【対策】

- Slack については、当面様子見で課題が出てきた時に再検討する。
- クラウドストレージについては、積極的に導入に向けての検討を進める。

神経科学ニュース編集委員会報告事項

（前回の理事会以降の活動報告）

- 2022 年 2 号（5 月号）の原稿を予定通り収集・校了し、5 月 10 日に発行した（別添 1）。
- 2022 年 3 号（8 月号）の原稿を予定通り収集・校了し、8 月 10 日に発行する予定である（別添 2）。
- PDF 版だけでは読みにくいとの意見があるため、PDF 版・HTML 版の同時発行に向けて情報を集めた。学会ホームページを作成している松本氏に HTML 版の作成を依頼した場合、HTML テンプレート作成に係る初期費用に約 50 万円、毎号の HTML 作成費用に約 10 万円の支出が想定される（別添 3、4）。良心的な金額であり、進めるべきと判断している。但しホームページ委員会から松本氏に依頼している研究室マップが完了してからとなる。
- PDF 版はソラノマドプロジェクトで作成しているが、松本氏が連携しているアーツユニットに依頼した場合の見積りを取得した（別添 5、6）。ソラノマドプロジェクトと比して価格が抑えられることはなさそうで、デザインの継続性からはソラノマドプロジェクトのままで良いと考え

ている。

(今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画)

- 最大ページ数に配慮して、各委員が担当号の原稿を収集し、校正を全委員で分担して行う。
- PDF 版・HTML 版の同時発行に向けて準備を進める。

(特記事項)

- HTML 版の発行後にも PDF 版の継続が必要かを、PDF 版へのアクセス数や会員へのアンケート調査等により検討することが望ましい。なお PDF 版を廃止した場合、作成費は削減されるが、大会報告や追悼文など学会のイベントの記録としてのアーカイブ性が失われる恐れがある。

ホームページ委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

- ホームページ委員会開催 (2022 年 4 月 26 日開催)
- 臨時ホームページ委員会開催 (2022 年 7 月 22 日開催)
- 日本神経科学研究室リスト・マップ作成に関する準備作業
- 神経科学トピックス記事査読作業 (5 件)
- 神経科学トピックス記事 HP 公開 (5 件; 別添資料 1 参照)
- 委員会メンバーによる SNS 書き込み (神経科学トピックス図および関連 URL 配信)

(今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画)

- 日本神経科学研究室リスト・マップ作成のための情報収集 (アンケート; 別添資料 2 参照)・公開
- 神経科学トピックス記事査読作業
- 神経科学トピックス記事 HP 公開
- 過去の追悼記事の整理および追悼コーナーへの集約

(特記事項)

- 掛川より上述の委員会活動報告および今後の計画について、簡潔に報告した。特に、現在準備を進めている新企画「日本神経科学学会研究室リスト化・マップ化」について、近日中に情報収集用アンケートを行う旨、周知するとともに、積極的に回答して頂くようお願いした。

アウトリーチ委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

- 市民公開講座
 - 「脳科学の達人 2022」(プレゼンター: 村山正宜、本城咲子) をハイブリッド開催 (2022.7.3)
 - 「脳科学の達人 2022」録画コンテンツの編集 (公開予定)
- 神経科学関連情報 Twitter 広告を担う「ニューロナビゲータ」の募集 (7/15 締切)
 - 応募数 18、選考中

(今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画)

- 市民公開講座
 - 「脳科学の達人 2022」の質問回答動画撮影、動画アーカイブ化
 - 「脳科学の達人 2023」の企画・立案
- ニューロナビゲータ決定・活動開始
 - 8 名選定、記念品発注・送付
 - マニュアル作成・送付

(特記事項)

- 「ニューロナビゲータ」は商標登録されているため名称変更検討中

※後日、医療用機械器具としての商標登録がなされているのみであり、それ以外の目的での商標登録はなされていないことから、学会アウトリーチ活動をする肩書きとして「ニューロナビゲータ」を自由に使用可能であることが明らかとなった。そのような目的での同名称の、学会としての商標登録を今後検討する。

産学連携推進委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

- 産学連携シンポジウム

- 「メタバースと脳科学」をハイブリッド開催（2022.7.1）
- シンポジスト：杉本麻樹（慶應大）、宮脇陽一（電通大）、小林七彩（医歯大）、藤井直敬（ハコスコ）
- 参加／視聴者：オンサイト約 100 名、オンライン約 200 名（Zoom Webinar、YouTube Live）
- 録画コンテンツの編集（公開予定）
- 学会ウェブサイト上での企業求人規程の検討・実施

（今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画）

- 産学連携シンポジウム
 - 「メタバースと脳科学」（2022）の動画アーカイブ化
 - 2023 産学連携シンポジウムの企画・立案

アドボカシー委員会報告事項

（前回の理事会以降の活動報告）

- 関連省庁、ファンディングエージェンシー（AMED、JST）等と意見交換を実施

（今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画）

- 関連学協会との連携

（特記事項）

- 上記内容について、簡単に説明を行った。

利益相反委員会報告事項

（前回の理事会以降の活動報告）

- Neuro2022 の大会から、（ランチョンセミナーでの）COI の取り扱いについて問い合わせがあり、それに対応を行った。

(今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画)

- 審議事項が発生した時に対応を行う。

(特記事項)

- 上記について、報告を行った。

脳科学辞典編集委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

- 計算論的神経科学分野は約 100 語選出し、60 語ほどは執筆者を選定して依頼。20 語ほど完成
<https://bsd.neuroinf.jp/w/index.php?title=計算論的神経科学分野執筆者一覧&oldid=46766>
- 分子・細胞・シナプスは「他の項目で言及されているが解説項目がないもの」というものでは 700 語ほどがあるが、この内、研究対象をしている研究者が探しやすい特定の分子に対する 240 語ほどの解説は候補者を選定して依頼する予定。ただし断られた場合は、あまり深追いはしないつもり。
- 書籍化
東京大学出版会からの連絡はこのところなし。
- 神経科学ニュースでの告知
新しく掲載した用語を掲載している。このところ委員長が忙しく、集まった項目もなかったので、次回は飛ばすかもしれない。

臨床・関連学会連携委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

- 2022 年日本神経科学大会において神経内科学会、精神神経学会、神経化学学会との連携シンポジウムに関し、以下の企画を実施した。
- シンポジウムテーマ：Neuro2022 で基礎学会と臨床学会を結ぶ
- 司会
小野賢二郎先生：臨床・関連学会連携委員会委員
尾崎紀夫：臨床・関連学会連携委員会委員委員長

- 演者
 - ① 田中謙二先生：日本精神神経学会から
 - ② 戸田達史先生：日本神経学会から
 - ③ 村山繁雄先生：日本神経病理学会から
 - ④ 伊佐正先生：日本脳科学関連学会連合から
- 日本脳科学関連学会連合を介した連携
- 産学連携活動（産学連携諮問委員会の設置）や健康医療戦略に関する意見表出などについて討議された。
- 日本学術会議を介した連携
- 8/27/2022、神経倫理(脳とこころ分科会・神経科学分科会の合同)に関するシンポジウムを開催予定。

（今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画）

- 本年度も引き続き、臨床・関連学会等における連携企画を検討予定。

（特記事項）

- 専門医制度の動向から臨床系若手の神経科学領域への参入増加は厳しい状況が続いている。

ダイバーシティ対応委員会報告事項

（前回の理事会以降の活動報告）

- 第 45 回大会 Neuro2022 沖縄大会において、ランチョンセミナーが行われた。合同大会のため、大会委員会の富山大学東田千尋先生、OIST Yoe Uusisaari 先生が企画し、「ひとりひとりが輝く人材育成」として、田中和正先生（OIST）、相田美砂子先生（広島大学）よりお話し頂いたのち、フロアおよびオンラインで活発な議論が行われた。さらに、大会後にアンケートを行い（事前に委員会において承認済み）、現在は大会委員会を中心に集計中である。
- 男女共同参画学協会連絡会 第一回臨時社員総会と第 20 期第 2 回運営委員会（2022 年 3 月 29 日 zoom 開催）に参加した。

(今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画)

- 男女共同参画学協会連絡会に参加予定 (年 3 回; 12 月、3 月、8 月)。次回は第 20 期第 3 回運営委員会の予定 (8 月 22 日 zoom 開催)。

(追記事項)

- 前回の拡大理事会において、ダイバーシティに関する数値目標等を定款または内規に定めるかについて、委員会内で今後協議を行うよう諮問があった。これを受け、現在各委員からの意見を募っている (拡大理事会までに意見をまとめてメールにてご報告する予定です)。

(理事会における議論追記)

- 理事会における議論の結果、女性比率 30%以上という具体的な数値目標を、法人化細目案に明記することにより、会員に見えるようにすることが決まった。今後は法人化実行委員会により実現化される予定である。

倫理委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

- 医学系研究統合指針に対応した「ヒト脳機能の非侵襲研究の倫理問題などに関する指針」の改訂版を公開 (https://jnss.org/human_kaitei_seimei)
- 英文に関しては医学系研究統合指針の英語版がまだ公表されていなかったため、語句を合わせる必要性から医学系研究統合指針の英語版の公表を待つ方針。
- 「ヒト脳機能の非侵襲研究の倫理問題などに関する指針」を、侵襲的手法を用いたヒト神経科学研究を含めた「ヒト脳機能の神経科学研究に関する倫理問題等に関する指針」として発展改訂するために神戸大学脳神経内科・松本理器教授に委員会への参画を打診し、ご快諾いただいた。現在、松本委員側で協力者の人選中。

(今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画)

- 協力者の人選が済み次第、侵襲的手法を用いたヒト神経科学研究の章 (具体的にはてんかんモニター用の留置電極、パーキンソン病の深部電気刺激用の電極、埋め込み電極を用いた BMI 研究等) の執筆を開始する。

(特記事項)

- 他に新倫理指針でカバーすべきヒト神経科学研究の内容やその取りまとめに適切な人材に心当たりがあればご推挙いただきたい。
- 委員は学会員に限らないこと、委員の増員については理事会の審議事項ではないこと、の確認がなされた。

動物実験委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

①【マイクロチップ装着義務化】について

(現状) 令和元年度の動愛法改正に基づき当該処置が義務化されるのは、「第一種取扱業が6月1日以降に飼育・販売する犬猫」のみであり、実験動物は努力義務(実質的には任意)となった。サル類については、特定動物や特定外来生物としてマイクロチップ以外の個体識別が認められているので、従来と変更なし。

(詳細)

- 6月1日施行のマイクロチップ装着・登録の義務化は、第一種動物取扱業において飼養保管される犬猫のみが対象となる。
- 登録済みの犬猫を購入・譲受した場合には、所有者情報の登録変更が義務となる。
- 第一種動物取扱業以外において飼養保管される犬猫(実験用のイヌ・ネコを含む)に対する装着は努力義務である。
- 実験動物としてのイヌ・ネコであっても、努力義務に従ってISO規格のマイクロチップを装着した場合には、環境省データベース(日本獣医師会に委託)への登録が義務となる。
- 今回の改正法施行に伴い環境省告示「家庭動物の飼養保管基準」は改正されたが、「実験動物の飼養保管等基準」の改正は行わない。

「環境省動物愛護管理室長との質疑より」

日本実験動物学会@仙台(5月開催)

②【霊長類を対象とする実験ガイドライン】について

日本獣医学会で中村克樹先生が、当該ガイドラインについて、策定した目的等について話をします。

③【マカクサルの入手】について

日本実験動物学会のサル対策 WG に中村克樹先生が参加し、カニクイザルもアカゲザルも手に入らない現状に対する今後の対応策を検討します。

④【動愛法】について

動物実験廃止派は 2025 年に動愛法改正を考えている模様だが、環境省としてはもう少し長い期間を考えている。環境省は、今後、令和元年度の動愛法改正時のアンケート結果のレビューをする予定。実験動物学会は、レビューの際に、動物実験サイドの意見を聞くように要望中。

● 外部検証と情報公開が重要

各機関の外部検証の実施が進んでいないと、次回の動愛法の改正結果が厳しくなる可能性あり。

⑤【動物実験共通指針策定】について

複数の省庁による検討が発足している段階ではなく、担当者間で情報交換をしている段階から脱してはいない。

(今後、約 6 ヶ月の活動目標・計画)

- 「霊長類を対象とする実験ガイドライン」のフォロー
- 動連協/国動協/実験動物学会など、他団体との情報交換

ブレインビー委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

- 第 9 回脳科学五輪日本大会 (2022 年大会) の予選は 2022 年 4 月 9 日 (土) ~24 日 (日) の日程 (土日 6 日間を含む 15 日間) で、全国 100 会場以上の中から参加者自身が選んだ会場で分散して実施する CBT 方式で開催し、成績上位 7 名を入賞者とした。
- 入賞者 7 名に対して、2022 年 6 月 11 日 (土)、関東・関西の 2 会場同時で日本大会ファイナルテストを行い、以下の順位を確定させた。
- 順位 (1 位から順番に)
中川颯、阿部万里花、一高学仁、島田和佳、三好理輝、鳴神諒、下山優里香
- 上記 7 名に対しては、ファイナルテスト当日にそれぞれの会場となった玉川大学脳科学研究所と神戸大学理学部において、ラボ見学を行った (会場提供と見学対応をしてくださった先生方には

感謝しています)。

- 今年の入賞者7名と昨年の入賞者5名は Neuro2022 のオンライン参加の招待を行った。
- 本年度日本大会1位の中川颯さんについては、世界大会直前勉強会を ZOOM で3回開催した。
- Brain Bee World championship は、7月3日～9日にオンライン開催され、日本代表も出場。
- 全国の高校約4800校のうち、SSH など感度の高い高校を中心に700校程度を厳選して住所等を整理するとともに、興味をもつ高校教員リストを作成中

(今後、約6ヶ月の活動目標・計画)

- 次回大会の実施方法、実施時期は早期に確定させ、年内にビラの配布を完了させる。(まだ世界大会の日程が確定していないが、十分に対応できるように、予選会は今年より早い春休みに実施し、GW 時期に本選大会を行い、大会前に十分な勉強時間を確保する。
- 現状では予選は CBT による実施を続けざるを得ないと判断しているが、従来各地で行ってきた地区予選会の代わりに楽しめて、勉強になる講演会などの活動を、脳科学五輪自体の宣伝を兼ねて、予選大会2ヶ月前(2022 年中)までに複数回実施する(世界脳週間イベントとも連動させる)。
- 今年から、世界大会の共通教材が変更になったので、この内容や、予選対策の知識面の勉強ができる独自 ZOOM 勉強会などを開催し、動画を公開する。

生物科学連合担当委員会報告事項

(前回の理事会以降の活動報告)

1. 2021年7月6日

参議院選に際し、生物科学連合運営委員会が独自に行った各党への科学政策に対するアンケート結果が委員に配布された。理事長、宮川理事、磯村理事にアンケート結果とともに報告した。アンケート結果の会員への開示の仕方については理事に対応をゆだねた。

2. 2021年7月26日 16時～18時 zoom にて

生物科学学会連合 第25回定例会議が行われ、宮田が参加する予定

主な議題・報告・審議事項

議題：

1. 代表挨拶
2. 前回議事録確認について
3. 次期代表の選出について→8月に公示
4. 令和3年度事業報告について
5. 令和3年度会計報告について
6. 関連国際会議について
7. IBO・JBO（国際生物学オリンピック）について
8. 研究費・人材育成委員会について→JSPの報告書 資料参照 8月中に若手の研究助成に関して生科連として、参加学会へアンケートをとることとした
9. 生物教育・大学入試問題検討委員会について→資料参照 生物用語については、生物用語基礎、生物学の科目で重要用語のアンケートを取ることもなった。用語は現行の500語程度に抑えて、増やさない方針でアンケートを依頼することとなった。アンケート回答を部会で取りまとめ、日本学術会議へ提出する予定。
10. 地球生物プロジェクト委員会について
11. 学会誌（欧文）のアンケート結果について
12. 政策アンケートについて→今後も生科学連合で継続的に政党に政策アンケートをとることになった。今後は、前回回答した政策の実効性も聞く。ただしアンケートの時期については要検討が必要との意見があった。複数の傘下学会からは選挙期間中であったため、会員への周知を控えたとの意見。今後、運営委員会でアンケートの時期も検討する。
13. 日本学術会議の学術振興のグランドビジョンについて→今までのマスタープランを中止し、今後30年間程度の中長期的「学術振興のビジョン」を公募し、その中から学術会議が未来の学術振興構想の「グランドビジョン」を決めることとなった。説明会が7月15日にあった。生物科学連合で参加学会の考えをまとめて、生命科学全体の中長期計画を出すかを運営員会でも考える。傘下学会にアンケートを8月中に送る予定。学術会議オブザーバーの北原先生からは、各学会で構想を出すのではなく、学会横断的に学会連合でまとめて中長期ビジョンを提案されるような性質のものであるとの意見があった。小林代表から学術会議の現状として、政府から日本の科学技術の低迷に、学術会議に質問があり、学術会議では回答を作成していることの情報共有。
14. 国立沖縄自然史博物館の設立活動について→学術会議の未来の学術振興構想にも提出の予定。
15. その他

（今後、約6ヶ月の活動目標・計画）

- 定例会での提案内容は会議後報告いたします。

以上

日本神経科学学会会員構成

2022年7月1日現在

	正会員	海外正会員	若手会員	海外若手	学生会員	海外学生	シニア会員
分子・細胞神経科学	1,875	208	126	17	317	27	46
システム神経科学	1,349	172	111	15	236	15	67
臨床・病態神経科学	605	31	37	4	71	4	14
その他の神経科学	275	28	41	1	151	5	0
パネル不明	11	4	0	0	2	0	0
Total	4,115	443	315	37	777	51	127
名誉会員	19						
賛助会員 (1口10万円) ※	7						
全会員数	5,891						

※成茂科学 10口、 他6社はそれぞれ1口

(資料A)

資料 B

日本神経科学大会（継続的大会）2021年度（2021年4月から2022年3月まで）決算

科 目	2021年度決算
収入	
年次大会経費から繰り入れ	
第44回（2021年）大会準備金貸付金返還	2,000,000
第44回（2021年）大会からの繰入金 （事務室賃借料、事務委託費、システム委託費）	4,093,104
第44回（2021年）大会税金および手数料準備金	1,000,000
利息	
	306
収入合計	7,093,410
支出	
大会準備貸付金	
第46回（2023年）大会準備金	0
事務室賃借料	
事務室賃借料、通信・光熱費、事務機器使用料 （2021年4月-2022年3月）	1,936,680
事務委託費	
事務委託費（2021年4月-2022年3月）	2,387,318
システム委託費	
システム委託費（2021年4月-2022年3月）	324,000
税金	
第44回（2021年）大会 （2021年1月-2021年12月法人税＋消費税）	591,967
納税手数料	
決算書・税務申告書作成手数料* （2021年1月-2021年12月 後藤由紀税務会計事務所）	269,433
交通費	
旅費交通費（事務局経費）	88,800
郵送料	
郵送料（事務局経費）	8,860
雑支出	
大会参加登録費課金システム維持費	0
個人情報保護方針、著作権規程、利用規約等作成費用	123,437
大会アンケート関係費（粗品代、集計作業費）	0
振込手数料	4,620
その他	14,660
支出合計	5,749,775
収支差額 収入合計-支出合計	1,343,635
(A) 前期からの繰越額	
	39,263,959
(B) 2021年3月31日時点残高	
	40,877,027
(C) 未払い金調整額（*印額）	
	269,433
(D) 次期への繰越額（B - C）	
	40,607,594
(E) 繰越金増減額（D - A）	
	1,343,635

資料 C

日本神経科学大会（継続的大会）2022年度（2022年4月から2023年3月まで）予算

科 目		2022年度予算
収入		
年次大会経費から繰り入れ		
第45回（2022年）大会準備金貸付金返還		2,000,000
第45回（2022年）大会からの繰入金 （事務室賃借料、事務委託費、システム委託費）		4,000,000
第45回（2022年）大会税金および手数料準備金		1,000,000
利息		
		500
収入合計		7,000,500
支出		
大会準備貸付金		
第46回（2023年）大会準備金		500,000
第47回（2024年）大会準備金		2,000,000
事務室賃借料		
事務室賃借料、通信・光熱費、事務機器使用料 （2022年4月-2023年3月）		1,936,680
事務委託費		
事務委託費（2022年4月-2023年3月）		2,000,000
システム委託費		
システム委託費（2022年4月-2023年3月）		0
税金		
第45回（2022年）大会 （2022年1月-2022年12月 法人税＋消費税）		1,000,000
納税手数料		
決算書・税務申告書作成手数料 （2022年1月-2022年12月 後藤由紀税務会計事務所）		300,000
交通費		
旅費交通費（事務局経費）		600,000
郵送料		
郵送料（事務局経費）		20,000
雑支出		
大会参加登録費課金システム維持費		100,000
大会アンケート関係費（粗品代、集計作業費）		100,000
振込手数料		5,000
その他		50,000
支出合計		8,611,680
収支差額 収入合計-支出合計		-1,611,180
前期からの繰越額		40,607,594
次期への繰越額		38,996,414